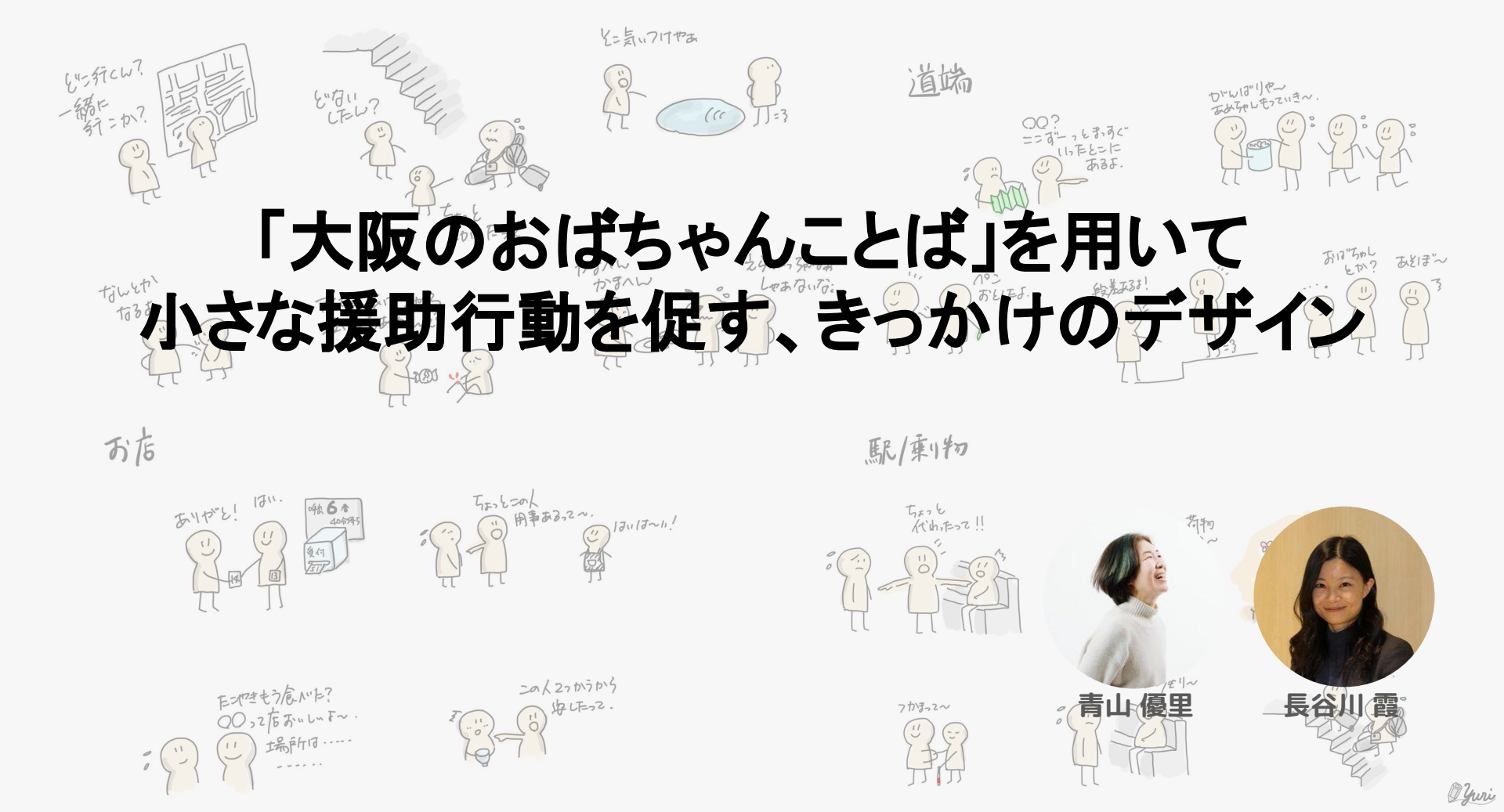
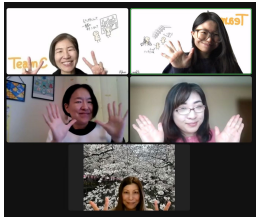
「大阪のおばちゃんことば」を用いて
小さな援助行動を促す、きっかけのデザイン



2023年度活動記録



1. ワークショップ実施を通じた検証・改良

a. 4月8日(土)13時~15時 3名（Web/1グループ）

b. 4月9日(日)10時~12時 3名（Web/1グループ）

c. 7月29日(土)14時～16時半 11名（リアル/2グループ）

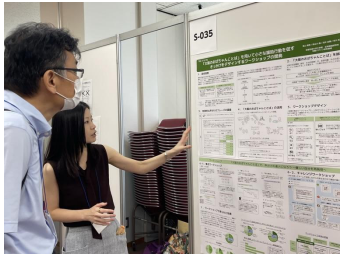
d. 8月6日(日)14時～16時半 11名（Web/2グループ）

e. 2月18日(日)14時～16時半 12名（リアル/3グループ）

2. 学会発表

a. 日本教育工学会 9月16日(土)@京都

b. 社会言語科学会 3月10日(日)@福岡



日本教育工学会

「大阪のおばちゃんことば」を用いて小さな援助行動を促すきっかけをデザインする ワークショップの開発

青山 優里 ／ 長谷川 霞 ／ 浅井 由剛 ／ 早川 克美
Yuri AOYAMA / Kasumi HASEGAWA / Yugo ASAI / Katsumi HAYAKAWA

京都芸術大学　大学院　芸術環境研究科　学際デザイン研究領域
Kyoto University of the Arts Graduate School

（あらまし）　援助行動（向社会的行動）の中でも「小さな親切行動」に焦点をあて、日常の小さな援助行動が増えることを期待して、「大阪のおばちゃんことば」を活用したワークショップを開発した。開発にあたっては、一般的にも広く認知されている大阪のおばちゃんのお節介な言語行動の特徴点を、方言学・社会言語行動学の観点から整理を行い、要素として反映させた。当該ワークショップの効果検証を行ったところ、被験者の大多数において行動変容の効果が得られた。

（キーワード）援助行動、方言、関西、ポライトネス、ワークショップ、デザイン

1. はじめに

街中で困っている人に声をかけるという行為は、小さな援助行動と言えるが、これらは、ほぼ無意識のうちに行なっている些細な言語行動や、日常行う言語行動と言え、研究対象としては挙げられづらい。小さな援助行動に着目すると「大阪のおばちゃんはお節介」という一般書や世間的な印象で語られる特徴点が浮かび上がってくる。本研究では、「大阪のおばちゃんことば」を活用することで小さな援助行動が増えることを期待して、ワークショップを開発し、その効果検証を行った。

2. 方言（大阪のおばちゃんことば）活用への着眼

大阪（関西）方言の特徴に関する先行研究では、1）小林・澤村（2014）「社会と言語活動の関係モデル」にて地域の社会環境が地域特有の具体的な言語活動として現れること、2）大阪（関西）方言は、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを多く含む方言であること、が明らかとなっている。筆者らはこれらを大阪のおばちゃんへ当てはめ、「大阪のおばちゃんことばの抽出を行った。

※小林・澤村（2014）「社会と言語活動の関係モデル」より筆者作成
（図1）大阪のおばちゃんの言語活動

抽出した「大阪のおばちゃんことば」が、先行研究結果と同様に、暖かく声がけしやすいフレーズであることを、渡辺（2013）の検証方法を参考に104名へ実験を行い、定性・定量調査から明らかにした。

大阪のおばちゃんことば	声がけのしやすさの結果	
	共通語	大阪のおばちゃんことば
どこ行くん？一緒に行こか？	33.0%	44.3%
どないしたん	23.6%	55.7%
なるようにしかなられへて	50.0%	33.0%
かまへん、かまへん	24.5%	58.5%
ちょっと助けたって	31.1%	54.7%
勉ちゃんあげるから泣いたらあかんで	15.1%	71.7%
えらいこっちやなぁ。しゃあないなぁ	15.1%	71.7%
そこ気ぃつけやぁ	20.8%	65.1%

（図2）大阪のおばちゃんことばの声がけのしやすさ調査結果

3. ワークショップの開発

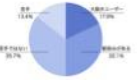
これらの検証を踏まえ、日常の小さな援助行動のきっかけとして、「大阪のおばちゃんことば」を活用するワークショップを開発した。本ワークショップは、2時間の集合ワークショップと、LINEでコミュニケーションをとりながら進める1週間のチャレンジワークショップの二部構成から成る。本ワークショップでは、「大阪のおばちゃんことば」を体験・体感し、自分なりの「大阪のおばちゃんことば」を見つけることで、日常の援助行動が促進されることを目指す。

（図3）ワークショップデザイン

本ワークショップは、丁寧な足場かけを行い、理解と実行を促す「インストラクショナルデザイン」と定着・継続させるための「ゲーミフィケーション」の要素でプログラムを構成している。さらに場面や大阪のおばちゃんの心情理解が進むよう、音声データの復唱や、穴埋めしたセリフの掛け合う「演劇（ロールプレイ）」の要素を取り入れている。

4. ワークショップの効果検証

ワークショップを計28名に実施。
調査日時：2022年11月20日～12日17日、2023年4月8日～16日（9回）
調査方法：オンライン
被験者数：28名（女性16名・男性12名）



（図4）参加者の大阪弁に対する親密度

（図5）　ワークショップ効果：援助行動を継続して実行するか

5. ワークショップ評価および今後の展望

検証の結果、当初期待していた、参加者が「大阪のおばちゃんことば」を体験し、自分なりのことばを見つけ、日常の援助行動で使いこなすことは達成できた。またそれ以上に、大阪のおばちゃんがどのような行動を取るかを参加者が認識したり、大阪のおばちゃんマインド（言語的発想法）を獲得する片鱗も見られるなど、期待以上の効果も得られた。

（図6）ワークショップの全体評価

今後は、被験者を増やしながら、被験者の言語行動の定量・定性分析を更に深め、「大阪のおばちゃんことば」ならびにワークショップが援助行動に与える影響をより詳細に紐解いていく。

（参考文献）
渡辺 匠、唐沢 かおり「共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討」『心理学研究』 第84巻 第1号、2013、pp. 20-27

小林 隆、澤村 美幸『ものの言いかた西東』岩波書店、 2014

吉岡泰夫「コミュニケーション意識と敬語行動にみるポライトネスの地域差・世代差 ： 首都圏と大阪のネイティブ話者比較」『社会言語学』第7巻1号、2004年、pp. 92-104

中西太郎「言語行動の方言学」『方言学の未来をひらく―オノマトペ・感動詞・談話・言語行動―』ひつじ書房、2017、pp. 339-407

16-1-S-35

「大阪のおばちゃんことば」を用いて小さな援助行動を促すきっかけをデザインするワークショップの開発

青山 優里／長谷川 蕾／浅井 由爾／早川 克美
京都芸術大学大学院　芸術環境研究科
学際デザイン研究領域

1．研究背景

援助行動(向社会的行動)の中でも「小さな親切行動」は、ほぼ無意識のうちに行なっている些細な行動であり、研究対象として挙げられづらい。他方、一般書や世間的な印象では「大阪のおばちゃんはお節介」という特徴が広く認知されている。この特徴点を学際的に紐解き、小さな援助行動を促すワークショップを開発した。

人間関係を円滑にするお笑いの文化	言語活動として表出する方言
・商人文化に基づく関係性構築のための協調的・並列的で、攻撃性のない誰も傷つかない笑い ・生活の延長線上に笑いを取り入れお互いの緊張を解き、コミュニケーションを「うまいことやる」	・船場言葉(なにわことば)は商人が使っていた、京都から公家言葉が受け継がれた丁寧なことばであり、横方向に人間関係を構築する ・大阪弁は柔らかく断定的表現を避ける表現が多く、相手への思いやりが表れている

大阪の文化・歴史的土壌（商人文化）の上にある、大阪の (協調的・並列的) 笑いと表現方法としての (開放的・共同性) 方言が、大阪のおばちゃんの言語行動の特徴に寄与している。

先行研究においても「社会と言語活動の関係モデル」にて地域の社会環境が地域特有の具体的な言語活動として現れることが明らかになっている。

社会と言語活動の関係モデル	大阪のおばちゃんの言語活動
言語活動（ものの言い方）	柔らかく断定的表現を避けた、相手への敬意と思いやりのある方言
↑	↑
言語態度（言語的発想法）	相手との距離の近さ（開放性）と会話の共同作業の感覚（共同性）を有する 並列的な笑いによって円滑かつ効果的に伝達する
↑	↑
言語環境	商人・町人の横並びの関係性の中で、他者が常に身近にいる環境で常に交渉と円滑な関係性構築が求められる
↑	↑
社会環境	商人文化

*小林隆『ものの言いかた西東』岩波書店、2014

2．「大阪のおばちゃんことば」を抽出

大阪の社会環境（歴史・文化的背景）が、言語活動（ものの言い方）として表出することを踏まえ、「大阪のおばちゃんことば」を抽出。

抽出のプロセス

大阪のおばちゃんを扱った各種媒体から約1,000件（約90,000文字）のことばを抽出

↓

役割語*1を参考に語法・言い回しを含むフレーズを抽出

↓

ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー*2を参考に相手の困っている、助けてほしいという要求に寄り添う要素を含むフレーズを抽出

*1 役割語：どんな人が喋ることばか連想できることば（例：おばあさん語、町人ことば）
*2 ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー：相手との距離を縮め、相手に積極的に関わろうとする対人配慮のストラテジー

3．効果的な声がけのフレーズの調査

調査	・共通語と「大阪のおばちゃんことば」のどちらが声がけしやすいか、107名に調査
結果	・８つのうち７つのフレーズで「大阪のおばちゃんことば」の方が声がけがしやすい結果となった ・「なるようにしかならへんて」は、イントネーションで「大阪のおばちゃんことば」としても成立するため「なんとかなるよ」に修正 ・「大阪のおばちゃんことば」の方が共通語より働かき因子の平均値が高く、「ひとなつっこい」「親しみやすい」「明るい」表現である

大阪のおばちゃんことば	声がけのしやすさの結果	
	共通語	大阪のおばちゃんことば
どこ行くん？一緒に行こか？	33.0%	44.3%
どないしたん	23.6%	55.7%
なるようにしかならへんて	50.0%	33.0%
かまへん、かまへん	24.5%	58.5%
ちょっと助けたって	31.1%	54.7%
飴ちゃんあげるから泣いたらあかんで	15.1%	71.7%
えらいこっちゃなぁ。しゃあないなぁ	15.1%	71.7%
そこ気いつけやぁ	20.8%	65.1%

4．「大阪のおばちゃんことば」の活用

８つのフレーズを「大阪のおばちゃんことば」として定義。

きっかけをデザインする手段

・日常の小さな援助行動のきっかけとして、「大阪のおばちゃんことば」を利用
・行動の習慣化を促し、気づきを得ることに有効なワークショップを採用
・行動を定着させるための「インストラクションデザイン」、継続させるための「ゲーミフィケーション」の要素を併せて盛り込む

ワークショップで得られること

・「大阪のおばちゃんことば」を体験・体感し、自分なりの「大阪のおばちゃんことば」を見つける
・日常の援助行動で、自分なりの「大阪のおばちゃんことば」を使いこなせる

5．ワークショップデザイン

２時間の集合ワークショップと、LINEでコミュニケーションをとりながら進める１週間のチャレンジワークショップの二部構成でワークショップをデザイン。

２時間のオンライン集合ワークショップ	１週間のLINEコミュニケーションチャレンジワークショップ
導入説明 効果を実現するメインワークを設計 きく：イントネーションやテンションを楽しみながら、「大阪のおばちゃんことば」をきく 知る：「大阪のおばちゃん」が何に気づき、どんな声がけをするかを知る 話す：３コマ漫画の吹き出しを「大阪のおばちゃん」の声がけを想像しながら、完成させ、話す 持ち帰る：「大阪のおばちゃんことば」を自分なりに使えることばにして持ち帰る ルール説明と予行演習でチャレンジワークショップにスムーズに移行	使いこなす：自分なりの「大阪のおばちゃんことば」を使って小さな援助行動を行う 毎日のデイリーミッションを設計 ・毎日LINEで声がけ回数、気づき、どんな声がけや援助行動をしたかを報告 LINEコミュニケーションを設計 ・他のメンバーのコメントに、気づきや刺激を受けた内容をリプライ 協働できるチームミッションを設計 ・「誰を（に）」「どこで」「どんな援助行動」をするか記載されたピンゴカードをメンバーでクリア ・今までしたことのない援助行動にもチャレンジ 終了時の報酬を設計 ・継続して利用できる「大阪のおばちゃんことば」のLINEスタンプをプレゼント

ワークショップ　「大阪のおばちゃんことば」で、声がけの達人になろう ～優しい自分を再発見～

6-1．集合ワークショップ

0. 導入・自己紹介

参加者が自己紹介と大阪のおばちゃんの援助行動やイメージを語り、特徴的な行動やイメージを、私たちが定義した大阪のおばちゃん像と紐付けていく。

1.「きく」ワーク

８つの「大阪のおばちゃんことば」をそれぞれ英語の授業のように聞いて、復唱するワーク。
イントネーションやテンションを体感。

実際の様子↓

2.「知る」ワーク

道端、駅・乗り物、お店など公共の場で大阪のおばちゃんがどのように声がけをしているか、具体的な例を説明。

休憩を挟んでクイズを実施。大阪のおばちゃんだったらどんな風に声を掛けるだろう？と想像を膨らませながら空欄のフレーズを考える。

回答は、それぞれ音読しながら発表してもらい、参加者間のフレーズやテンションの違いも体感・共有する。

3.「使う」ワーク

「大阪のおばちゃん」の声かけを想像しながら、３コマ漫画を完成させる。

３コマ漫画とすることで、援助者と非援助者の会話のやり取りや行動が、より具体的になり、大阪のおばちゃんの言動を追体験することに繋がる。

ファシリテーターの声

ワークショップ実施中には、吹き出しを追加する人がいたり、前述した大阪の並列的で協調的な笑いの要素が含まれたフレーズが織り込まれていたり、参加者が大阪のおばちゃんマインドを獲得しつつあることが見えた。

4.「持ち帰る」ワーク

８つの「大阪のおばちゃんことば」を自分なりに使えることばに作りかえ、持ち帰る。

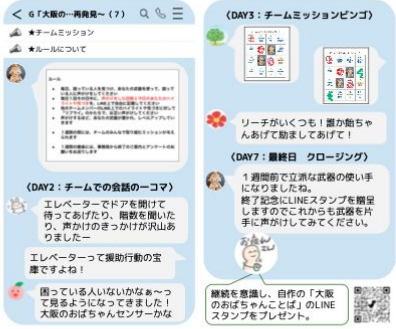
作りかえる際に、大阪弁にこだわらず、自分が日常で使いやすい・使えるフレーズで良いことを伝え、本来の目標である小さな援助行動のきっかけとして使えるフレーズを作る。

5. チェックアウト

後続のチャレンジワークショップの説明と予行演習を実施。

6-2．チャレンジワークショップ

LINEを使ってチームで会話しながら日常生活の中で援助行動に挑戦。



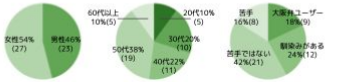
7．ワークショップで得られた効果

行動を定着させるための「インストラクションデザイン」、継続させるための「ゲーミフィケーション」の要素が機能した「ワークショップ」により、参加者は「大阪のおばちゃんことば」を体験し、自分なりのことばを見つけ、日常の援助行動のきっかけとして使いこなすことが出来たと言える。さらに、大阪のおばちゃんがどういう行動を取るかを参加者が認識したり、大阪のおばちゃんマインドを獲得する片鱗も見られるなど、期待以上の効果も得られた。

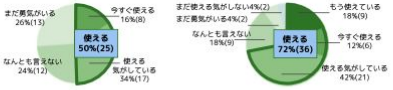
集合・チャレンジワークショップ全体を通じ、72%の人が、今後も継続して武器を使用できる（声かけが出来る）と回答。

参加者属性

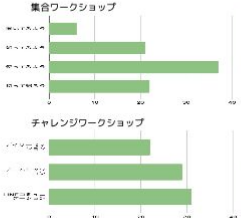
計14回・50名にワークショップを実施（2022年12月～2023年8月）



ワークショップで武器が使える（声かけが出来る）ようになったか



変化に影響したワークショップコンテンツ（複数選択可）



大阪のおばちゃんの行動を知り、周りの些細なことにも気が付くようになり、声かけしようと思えるようになった。

参加者の声

声をかけても良いんだと思えるようになった。

グループでのミッションやコミュニケーションが刺激になり、行動することができた。

ワークショップ全体の評価

	大阪のおばちゃん	大阪のおばちゃんことば	援助行動を促すきっかけ
効果として得られた範囲			
Why	行動が独創的	開放的・共同性のある方言	ことばと行動が習慣を変える
What	どのような行動をとるのかを認識する	フレーズを体験し、開放性・並列性を体感する	援助行動の疑似体験もしくは実体験をする
期待していた範囲			
How	援助行動にまつわるエピソードを知る	フレーズを知り、体験する	きっかけとしての発話（声かけ）
要素	読む、（物語として）きく	（音として）きく、話す	話す（使う）

今後の展望

今後は、参加者の言語行動の定量・定性分析を更に深め、「大阪のおばちゃんことば」ならびにワークショップが援助行動に与える影響をより詳細に紐解いていく。

社会言語科学会

方言の実践的調査・観察方法の観点からみた「大阪のおばちゃんことば」を用いたワークショップの評価

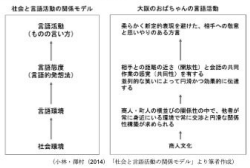
長谷川　霞（京都芸術大学大学院）

1. 研究目的

方言の社会的位置付けは，近世から現在に到るまでコミュニケーション媒体や社会環境の中で変化を遂げ続けている．特に現在においては，アクセサリーとして方言が使われるなど，方言使用は活発化の状態とも言える．中西（2017）は，言語行動の地域跨は，ほぼ無意識のうちに行なっている些細な言語行動や，日常行う言語行動に現れうるが，調査の着眼点として挙げづらい部分もあるため，専門家に限らず世間の多くの眼を通して得た意見を参照するのも 1 つの方法だと指摘している．ここに依拠するとき，大阪のおばちゃんのお節介は，「多くの人の目にとまる特徴的な言語行動」として着目に値するだろう．筆者らが開発した「大阪のおばちゃんことば」を用いたワークショップを通じて，方言がどのように受け入れられ利用されていくのか，またワークショップ自体が言語行動調査方法の中においてどのような位置付けにあるのかを明らかにする．

2. ワークショップを通じた方言の受容・利活用の評価

筆者らは「大阪のおばちゃんことば」を用いて小さな援助行動を促すきっかけをデザインする，ワークショップを開発した[1]．「大阪のおばちゃんことば」を体験・体感し，自分なりの「大阪のおばちゃんことば」を発見することで日常の援助行動が促進されることを目指した．

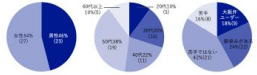


（小林・澤村（2014）「社会と言語活動の関係モデル」より筆者作成）

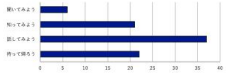
（図1）大阪のおばちゃんの言語活動

（図2）ワークショップ概要

大阪（関西）方言の特徴に関する先行研究では，小林・澤村（2014）「社会と言語活動の関係モデル」にて地域の社会環境が地域特有の具体的な言語活動として現れることが明らかにされている．これを大阪のおばちゃんの言語行動と照らし合わせると，図 1 の通り，大阪の商人文化・笑いの文化が，断定的表現を避け，柔らかく，相手への敬意と思いやりのあるものの言い方（方言）として表出していると言える．これを踏まえ 8 つの「大阪のおばちゃんことば」[2]の抽出を行い，ワークショップの骨格とした．ワークショップ構成は「大阪のおばちゃんことば」を音として「きく」，大阪のおばちゃんの言語行動を「知る」，大阪のおばちゃんならどのように話すだろうと想像しながら「話す」，自分なりの「大阪のおばちゃんことば」にアレンジして「持ち帰る」2 時間の集合ワークショップと，参加者同士が LINE コミュニケーションをとりながら「使いこなす」1 週間のチャレンジワークショップの二部構成とした．



（図3）集合ワークショップ参加者属性



（図4）集合ワークショップにおいて日常の変化に影響のあったワーク

計 14 回（2022 年 12 月～2023 年 8 月），20 代～60 代以上の計 50 名（男性 23 名，女性 27 名）へワークショップを実施．ワークショップ全体を通じ 72%の人が今後も継続して「大阪のおばちゃんことば」を用いて声かけが出来ると回答した．大阪弁に対する近しさについても，図 3 の通り，日常的に使用している人（大阪弁ユーザー）から苦手と感じる人まで参加しており，本ワークショップが方言話者以外にも効果があることが明らかとなった．特に誘導的要素を取り込み，日常生活の 3 コマ漫画の吹き出しを埋めることで，大阪のおばちゃんの声かけを再現し追体験する「話す」ワークが，図 4 の通り，受容に最も効果があった．

また，「大阪のおばちゃんの行動を知り，周りの些細なことにも気が付くようになり，声がけしようと思えるようになった」などの参加者からの発言もあり，大阪のおばちゃんがどのような行動を取るかを参加者が認識し，大阪のおばちゃんマインドを獲得する片鱗も見られた．本検証における参加者のうち大阪弁を日常的に使う人は 18%であり，それ以外の 72%は方言話者ではない中においては，「知る」ワーク・「話す」ワーク・自分が日常的に使う表現と比較しながら，「持ち帰る」ワークを通じて，音や文字面としての差異だけでなく，その背後にある言語態度を理解し，参加者自身の出身地域とは異なる方言を受容していたと言える．これは先述の「社会と言語活動の関係モデル」と照らし合わせると言語表現に寄与する言語態度を参加者が理解・体得した状態と整理できる．

3. 言語行動調査法における本ワークショップの位置付け

先述のように，ワークショップを通じて方言がアクセサリー的に参加者に受容されたことが検証されたが，その過程を言語行動調査法の観点から，紐解いていく．

言語行動の調査方法については，中西（2017）が言語行動調査の 6 つの観点[3]と 5 つの調査方法[4]の相性と特性を整理している．中西（2017）による言語行動調査の観点と本ワークショップでのワーク内容を突合すると，表 1 のように整理でき，集合ワークショップはロールプレイ調査，内省調査，アンケート調査の複合形と言え，本論では「ワークショップ調査法」として論じていきたい．

（表1）各種調査法と言語行動調査の相性ー本ワークショップとの関係ー

	集合ワークショップ	チャレンジワークショップ
言語行動の自然さ	✓ ミコマ漫画を使って言語行動をロールプレイしており，ロールプレイ調査同様の調査が可能	✓ 自然観察調査に近い調査が可能 ✓ ただしLINEとその自己申告のため，集合ワークショップでのロールプレイより自然な言語行動や観察が可能だが，結局は自然言語観察には劣る
言語行動の展開	✓ ミコマ漫画を使って言語行動をロールプレイしており，ロールプレイ調査同様の調査が可能	✓ 自然観察調査に近い調査が可能 ✓ ただしLINEとその自己申告のため，集合ワークショップでのロールプレイより自然な言語行動や観察が可能だが，結局は自然言語観察には劣る
参加者の意識	✓ **リフレクションや相互コミュニケーションを通じて，自身の意識を顕み，言語化しており，定性的にデータの取得が可能** ✓ **ワークショップの中で，設定を変更することで，話者の意識による話者パターンの違いを調査することができる** ✓ **ワークショップ後のアンケート調査を通じた検証も可能**	✓ **リフレクションや相互コミュニケーションを通じて，自身の意識を顕み，言語化しており，定性的にデータの取得が可能**
参加者の属性	✓ ロールプレイ調査同様の相性	✓ ロールプレイ調査同様の相性
場面の網羅性	✓ **対象場面をワークショップ内でコントロールしており，狙った場面の調査が可能** ✓ **参加者はワークショップへ参加している意識のため，自然にデータの収集が可能（参加者のも提約負担が少ない）**	✓ **対象場面をワークショップ上で扱っているため，対象となる場面のみが毎当れてくるため，データの取捨選択が不要**
多人数調査との相性	✓ 多人数調査には不向き	✓ 多人数調査には不向き

（中西（2017）を基に筆者作成）

[1] https://graduate.air-u.kyoto-art.ac.jp/art/ids/study/760/

[2] 「どこ行くん,一緒にいこか」「どないしたん」「なんとかなるよ」「かまへん,かまへん」「ちょっと助けたって」「飴ちゃんあげるから泣いたらあかんで」「えらいこっちゃなぁ,しゃあないなぁ」「そこ気いつけやぁ」

[3] 言語行動の自然さ,言語行動の展開,参加者の意識,参加者の属性,場面の網羅性,多人数調査との相性

[4] 自然観察調査・ロールプレイ調査・面接調査・アンケート調査・内省調査

社会言語科学会

集合ワークショップは，ロールプレイ調査（シナリオなし）方式に近しい手法と言える．先行研究においても，井上を中心とした（2014）「方言談話の地域差と世代差に関する研究 成果報告書」にてロールプレイを採用し，会話データベースを「行為的機能」と「機能的要素」の観点から，比較検討を行ない，各地方言の談話構造や談話展開の違いを明らかにしている．これらの先行研究で利用されているデータは，ロールプレイ形式で会話・収録された会話データのみにとどまっており，発話者の意識についてはデータの取得，分析はなされていない．

これに対して「ワークショップ調査法」は，「参加者の意識」の観点で大きな差を有していると言える．「参加者の意識」の観点は，中西（2017）では「対話相手への親疎意識などを問う参加者の意識」であり「この点を探るのに最も適しているのは，自分の意識を顧みることができる内省調査」であると整理されている．この観点を親疎意識に限らず，文字通りの「参加者の意識」に重きをおいて捉えると，本ワークショップでは，ワークショップ内でのリフレクションや参加者同士の相互コミュニケーションを通じて，自身の意識を顧み，それらが言語化されるため，定性的なデータとして「参加者の意識」を収集することができると言えるだろう．さらに，内省調査に比べて，これらのデータはワークショップ内でリアルタイムに発言されるものであり，後からその時の意識を振り返る内省調査よりも，より新鮮な情報と考えられる．これらは特に「話す」ワークにて見られたものだが，「持ち帰る」のワークにおいても，自分自身が日常的に使うものの言い方と方言でのものの言い方を照らし合わせる，自分なりの表現に置き換える中で，「大阪のおばちゃんんの方が，ポジティブで前向きな表現で励まされる感じが強い」など，それぞれのものの言い方がどのような言語態度から表出しているのかを内省，理解を深めていた．つまり，渋谷（2003）が「言語行動の分野の課題」において指摘している「なぜそのような行動がその場面や社会で採られるのかという解釈や説明（why の問題）に言及するものが少なかった」という課題に対して，本ワークショップでは，参加者自身の言語行動のリフレクションが，参加者同士の対話として表出されることで一定の説明力を持たせることができていると言えるのではないか．

（表2）各種調査法と言語行動調査の相性－特徴－

	特徴
言語行動の自然さ	✓ 自然観察調査では非言語表現についても自然なものを記録できる ✓ ロールプレイ調査は，実際にその場面の言語行動を似せて演じる，という点で，意識上で振り返る面接調査とは一線をかくし，自然観察調査に劣らない自然な言語行動が得られる ✓ **ワークショップ調査は，ロールプレイ調査と同等の相性を有していると言える**
言語行動の展開	✓ 自然観察調査・ロールプレイ調査どちらも，実際に対話相手となる人物がいて，やりとりが行われるため，自然に言語行動を展開する（させる）ことができる ✓ **ワークショップ調査は，ロールプレイ調査と同等の相性を有していると言える**
参加者の意識	✓ 自然観察調査は，単体では会話参加者間の親疎意識などを捉えるのが難しい ✓ 内省調査は，自分の意識を顧みることができる最も適切な方法 ✓ **ワークショップ調査は，リフレクションや相互コミュニケーションを通じて，自身の意識を顧み，言語化するため，観察が可能となる**
参加者の属性	✓ アンケート調査・面接調査が優れている ✓ ロールプレイ調査は，社会的属性のみならず，ロールプレイ調査への適性も考慮に入れる必要があるため，条件の揃った人物を見つけ出すのが難しい ✓ 自然観察調査は，観察地点をずらすことでターゲットの属性の調整を試みることができるが，労力・時間がかかる
場面の網羅性	✓ 内省調査は，自分の思い起こすままに様々な場面の言語行動を採取でき，網羅性に優れている ✓ 面接調査・アンケート調査は，体系的に設問化し，網羅的に尋ねることが可能である ✓ ロールプレイ調査では，1つ1つの場面の収録に時間がかかり，場面を網羅するには多くの時間を要する上，収録に協力的な話者が必要となる。 ✓ 自然観察法では，狙いの場面がうまくを起するかの問題があり，網羅することが困難である ✓ **ワークショップ調査では，対象場面をワークショップ内でコントロールすることが可能なと，参加者はワークショップへ参加している意識のため，自然にデータの収録が可能（参加者の心理的負担が少ない）**
多人数調査との相性	✓ アンケート調査が有効である ✓ 自然観察調査やロールプレイ調査は，時間・労力がかかる

（中西（2017）を基に筆者作成）

（表3）各種調査法と言語行動調査の相性

	自然観察調査		ロールプレイ調査		面接調査	アンケート調査	内省調査	ワークショップ
	シナリオあり	シナリオなし						
言語行動の自然さ	◎	△	○	△	△	△	×	○
言語行動の展開	◎	◎	◎	○	○	△	◎	◎
参加者の意識	×	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
参加者の属性	△	○	○	◎	◎	×	○	○
場面の網羅性	×	△	△	○	○	◎	○	○
多人数調査との相性	△	△	△	○	◎	×	△	△

（中西（2017）を基に吉村紀が加筆加筆作成）

上記を踏まえ，言語行動調査におけるワークショップ調査を他の調査方法と比較すると，ワークショップ調査は「言語行動の自然さ」と「言語行動の展開」において ロールプレイ調査と同等の相性を有している．参加者の意識については，内省調査が最も適していると整理がなされているが，ワークショップにおいては，内省したことを，参加者同士の会話やコミュニケーションを通じて，リアルタイムに発話されることから，内省調査と同等の相性を有していると言えよう．最後に場面の網羅性に関しては，ワークショップ主催者側が対象場面をコントロールすることができるため，狙った場面での調査が可能と言える．恣意的に網羅的に場面設定が可能なと，言語行動の自然さと展開もロールプレイ同等の自然なものを取得することができる．

これらを更に中西（2017）にて整理されている言語行動の調査法に並べてみると，表3のように「ワークショップ調査」は，言語行動の意識・言語行動の展開に強みを有し，ロールプレイ調査と内省調査の良さを併せ持つ調査方法と評価できる．本ワークショップは，方言習得のプロセスならびに，言語行動（ものの言い方）と言語態度（言語的発想法）の過程を明らかにする調査としても機能していると言えるのではないか．

4. 結論

ワークショップ参加者は，大阪のおばちゃんという特徴的かつ日常的な言語行動を，きく，知る，話す段階を経て，表面に現れる言語表現だけではなく，根底にある言語態度を理解・体得していることが検証された．また，その過程がワークショップでの発話や内省から明らかとなった．

言語行動調査方法の観点からは，本ワークショップは複合的な調査方法であり，特にロールプレイを通じた自らの言語行動に対する内省が得られている点は，言語行動解釈の妥当性を高めることに寄与している．当該ワークショップは「大阪のおばちゃんことば」のみでの検証となっているため，異なる方言においても「きく」「知る」「話す」「持ち帰る」ワークを通じて，言語行動（ものの言い方）と言語態度（言語的発想法）の過程が明らかにできるのではないだろうか．ワークショップ調査法が言語行動調査の新たな方法として体系化，確立化するためには，更なる事例の積み上げが必要となる．

また，本論では集合ワークショップに焦点を当て「ワークショップ調査法」としての可能性に触れたが，ワークショップ自体は，参加者は，1週間の期間内で毎日その日の援助行動について行動したことや気づきを LINE 上にて自由記述で記載するチャレンジワークショップも実施している．このチャレンジワークショップは，中西（2017）の分類に則ると，自然観察調査・アンケート調査・内省調査の複合形だが，言語行動調査方法としては分類の一つとしてまだ挙げられていない「日記調査法」と言えると考えられ，ここについては更なる検証を行なっていく．

謝辞　本研究ならびにワークショップ開発においては，京都芸術大学早川教授，浅井准教授からの惜しみないご指導ご鞭撻，共同研究者であり同大学研究員の青山氏の多大なるご協力を賜りましたことを，心より感謝申し上げます．

参考文献

小林隆，澤村美幸（2014）．ものの言いかた西東　岩波新書，171

中西太郎（2017）．言語行動の方言学　ひつじ書房，339-408

荻野綱男（2003）．言語行動の調査法　朝倉日本語講座９　言語行動，朝倉書店，215-240

渋谷勝己（2003）．言語行動の研究史　朝倉日本語講座９　言語行動，朝倉書店，241-261

小林隆（編）（2018）．コミュニケーションの方言学　ひつじ書房

渡辺 匠，唐沢 かおり（2013）共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討　心理学研究, 84, 1, 20-27

吉岡泰夫(2004)．コミュニケーション意識と敬語行動にみるポライトネスの地域差・世代差 ： 首都圏と大阪のネイティブ話者比較 社会言語学, 92-104

井上文子（編）（2014）．方言談話の地域差と世代差に関する研究 成果報告書　国立国語研究所

社会言語科学会

各種調査法と言語行動調査の相性ー本ワークショップとの関係ー

- 中西(2017)が言語行動調査の6つの観点と5つの調査方法の相性と特性を整理
- 本ワークショップのうち集合ワークショップは、ロールプレイ調査，内省調査，アンケート調査の複合形と言える

	自然観察調査	ロールプレイ調査		面接調査	アンケート調査	内省調査
		シナリオあり	シナリオなし			
言語行動の自然さ	◎	△	○	△	△	×
言語行動の展開	◎	◎	◎	○	○	△
参加者の意識	×	○	○	◎	◎	◎
参加者の属性	△	○	○	◎	◎	×
場面の網羅性	×	△	△	○	○	◎
多人数調査との相性	△	△	△	○	◎	×
本ワークショップとの突合	チャレンジワークショップ（「話す」ワーク）	ー	「話す」ワーク	ー	事後アンケート	ワークショップ内の対話

（中西（2017）を基に筆者作成）

各種調査法と言語行動調査の相性ー本ワークショップとの関係ー

- 「方言談話の地域差と世代差に関する研究成果報告書」（2014）でも**ロールプレイ形式の会話データを用いた分析があるが、発話者の意識についてのデータの取得・分析はない**
- ワークショップ調査法では**定性的かつリアルタイムでの参加者（発話者）の意識を収集することが可能**

	集合ワークショップにおける言語行動調査との関係
言語行動の自然さ	✓ ３コマ漫画を使って言語行動をロールプレイしており、**ロールプレイ調査同等**の調査が可能
言語行動の展開	✓ ３コマ漫画を使って言語行動をロールプレイしており、**ロールプレイ調査同等**の調査が可能
参加者の意識	✓ **リフレクションや相互コミュニケーションを通じて、自身の意識を顧み、言語化しており、定性的にデータの取得が可能** ✓ **ワークショップの中で、設定を変更することで、話者の意識による回答パターンの違いを調査することができる** ✓ **ワークショップ後のアンケート調査を通じた確認も可能**
参加者の属性	✓ ロールプレイ調査同等の相性
場面の網羅性	✓ **対象場面をワークショップ内でコントロールしており、狙った場面の調査が可能** ✓ **参加者はワークショップへ参加している意識のため、自然にデータの収録が可能（参加者の心理的負担が少ない）**
多人数調査との相性	✓ 多人数調査には不向き

（中西（2017）を基に筆者作成）

言語行動分野におけるWhyの問題

- 渋谷（2003）が指摘する「なぜそのような行動がその場面や社会で採られるのかという解釈や説明(whyの問題)に言及するものが少なかった」課題

話す

持ち帰る

【参加者の発言・アンケートより】

- ✓ 余計な一言が笑えて頼りやすい。綺麗に言われるとこちらもカッコつけてしまう
- ✓ 大阪のおばちゃんは共感力が高く、寄り添ってくれる
- ✓ 特におばちゃんは全体最適的な考えではなく今気づいたものを助けている
- ✓ 援助は主観的な部分（自分がしたい）があって始まる、ということを感じ、多少押し付けでも良いということに気付けたので少し実行に向けた心理的ハードルが下がった。
- ✓ 大阪のおばちゃんの方が、ポジティブで前向きな表現で励まされる感じが強い

- 参加者は、**それぞれのものの言い方がどのような言語態度から表出しているのかを内省,理解を深めて**いた
- 本ワークショップでは,**参加者自身の言語行動のリフレクションが参加者同士の対話として表出されることでWhyの問題に対して、一定の説明力**を持たせることができている
- **言語行動(ものの言い方)と言語態度(言語的発想法)の過程を明らかにする調査**としても機能している

各種調査法と言語行動調査の相性ー特徴ー

	特徴
言語行動の自然さ	✓ 自然観察調査では非言語表現についても自然なものを記録できる ✓ **ロールプレイ調査は、実際にその場面の言語行動を相手を交えて演じる、という点で、意識上で振り返る面接調査とは一線をかくし、自然観察調査に準じた自然な言語行動**が得られる ✓ **ワークショップ調査は、ロールプレイ調査と同等の相性を有していると言える**
言語行動の展開	✓ 自然観察調査・ロールプレイ調査どちらも、実際に対話相手となる人物がいて、やりとりが行われるため、自然に言語行動を展開する（させる）ことができる ✓ **ワークショップ調査は、ロールプレイ調査と同等の相性を有していると言える**
参加者の意識	✓ 自然観察調査は、単体では会話参加者間の親疎意識などを捉えるのが難しい ✓ 内省調査は、自分の意識を顧みることができる最も適切な方法 ✓ **ワークショップ調査は、リフレクションや相互コミュニケーションを通じて、自身の意識を顧み、言語化するため、観察が可能となる**
参加者の属性	✓ アンケート調査・面接調査が優れている ✓ ロールプレイ調査は、社会的属性のみならず、ロールプレイ調査への適性も考慮に入れる必要があるため、条件の揃った人物を見つけ出すのが難しい ✓ 自然観察調査は、観察地点をずらすことでターゲットの属性の調整を試みることができるが、労力・時間がかかる
場面の網羅性	✓ 内省調査は、自分の思い起こすままに様々な場面の言語行動を採取でき、網羅性に優れている ✓ 面接調査・アンケート調査は、体系的に設問化し、網羅的に尋ねることが可能である ✓ ロールプレイ調査では、１つ１つの場面の収録に時間がかかり、場面を網羅するには多くの時間を要する上、収録に協力的な話者が必要となる。 ✓ 自然観察法では、狙いの場面がうまく生起するかの問題があり、網羅することが困難である ✓ **ワークショップ調査では、対象場面をワークショップ内でコントロールすることが可能な上、参加者はワークショップへ参加している意識のため、自然にデータの収録が可能（参加者の心理的負担が少ない）**
多人数調査との相性	✓ アンケート調査が有効である ✓ 自然観察調査やロールプレイ調査は、時間・労力がかかる

（中西（2017）を基に筆者作成）

社会言語科学会

ワークショップ調査法の特徴

- ワークショップ調査は、**言語行動の意識・言語行動の展開に強みを有し，ロールプレイ調査と内省調査の良さを併せ持つ**調査方法と評価できる

	自然観察調査	ロールプレイ調査		面接調査	アンケート調査	内省調査	ワークショップ調査
		シナリオあり	シナリオなし				
言語行動の自然さ	◎	△	○	△	△	×	○
言語行動の展開	◎	◎	◎	○	○	△	◎
参加者の意識	×	○	○	◎	◎	◎	◎
参加者の属性	△	○	○	◎	◎	×	○
場面の網羅性	×	△	△	○	○	◎	○
多人数調査との相性	△	△	△	○	◎	×	△

（中西（2017）を基に筆者作成）

「大阪のおばちゃんことば」を用いて小さな援助行動を促す、きっかけのデザイン　―1―

結論

ワークショップの評価

- ワークショップ参加者は大阪のおばちゃんという特徴的かつ日常的な言語行動を、きく、知る、話す段階を経て、**表面に現れる言語表現だけではなく、根底にある言語態度を理解・体得**していることが検証された.

言語行動調査からみた本ワークショップ

- 本ワークショップはロールプレイ調査、内省調査、アンケート調査、自然観察調査の要素を含む複合的な調査方法である
- ロールプレイを通じた自らの言語行動に対する内省が得られている点は、**言語行動解釈の妥当性を高める**ことに寄与している
- 本ワークショップは**言語行動(ものの言い方)と言語態度(言語的発想法)の過程を明らかにする**調査としても機能している

言語行動調査法としてのワークショップ調査

- **言語行動の意識・言語行動の展開に強み**を有し，**ロールプレイ調査と内省調査の良さ**を併せ持つ調査方法である

「大阪のおばちゃんことば」を用いて小さな援助行動を促す、きっかけのデザイン　―10―

課題および今後の展望

- 言語行動調査法としてのワークショップ調査法の確立（異なる方言での適用可能性の確認、更なる事例の積み上げ）
- 今回、未検証となっているチャレンジワークショップを、言語行動調査方法としては分類の一つとしてまだ挙げられていない**「日記調査法」**として検証・分析を行う

	チャレンジワークショップにおける言語行動調査との関係
言語行動の自然さ	✓ **自然観察調査に近しい**調査が可能 ✓ ただしLINE上での自己申告のため、集合ワークショップでのロールプレイよりは自然な言語行動の観察が可能だが、純粋な自然言語観察には劣る
言語行動の展開	✓ 自然観察調査に近しい調査が可能 ✓ ただしLINE上での自己申告のため、集合ワークショップでのロールプレイよりは自然な言語行動の観察が可能だが、純粋な自然言語観察には劣る
参加者の意識	✓ **リフレクションや相互コミュニケーションを通じて、自身の意識を顧み、言語化しており、定性的にデータの取得が可能**
参加者の属性	✓ ロールプレイ調査同等の相性
場面の網羅性	✓ **対象場面をワークショップ上で絞っているため、対象となる場面のみが申告されてくるため、データの取捨選択が不要**
多人数調査との相性	✓ 多人数調査には不向き

（中西（2017）を基に筆者作成）

「大阪のおばちゃんことば」を用いて小さな援助行動を促す、きっかけのデザイン　―11―